

佐伯を素材とした

独歩の作品

(上)

佐伯 山内 武 麒

独歩が著作した作品の中で、佐伯の自然や人物を素材として書かれたものについて、その解説を試みてみよう。発表の順に従うことにする。

一、わが土曜日の夜

これは明治二十七年十月十日発行の『家庭雑誌』第四卷第三十號に、茅舎主人の筆名で発表した小品である。

土曜日の夕暮は来りぬ。連日蕭々と降り続ける春雨。此日猶晴れやらす。山々峰々に漲ぎる水蒸気の彼方より、湿やかに黄昏来りぬ。

と書き出して、小説「うきよの波」を読み終って、しばらく思いに耽っていて、暗くなるのにも気がつかなかった。そこに弟が入って来て、燈をつけましようかと言ったのに驚いて見廻すと、室内は暗くてさびしさが書齋に

満ちていた。「もう今日も暮れたのか。いや明りは自分でつける」というと、弟は「そうですか」と言っ室から出てしまった。

しかし自分は燈をつけようともせず『うきよの波』の中の一句一句を口の中でくりかえしながらもの思いに耽けり、友人や知人のことを思い悲しくなっていた。

独歩の『欺かざるの記』の二十七年四月四日の記の中に

嗚呼「浮世の波」。朋友たちの一生を思へば、一種の悲哀を感じ。引頭は如何、富永は如何、高橋平吉は



独歩の文学碑(城山)

如何。石崎ためは如何、あゝ浮世のなみ。されど人性は美妙なり。彼等は彼等の一生を楽しく享けんのみ。とある。情景が同じであるように推察される。

この浮世の波はアドルフ・ステルン原作。森鷗外の翻訳小説である。

本文は次に窓外の景色を次のように叙してある。

立て障子開き、欄干に倚りてひたすら暮れゆく寂しき風物に眺め入りぬ。遙かに聳つものは元越山なり。元越山の彼方は太平洋に連なる日向灘なり。木立山右にあり。灘山左に横はる。所々にデルタをつくりつゝ流れゆく番匠川。雨をふくめる漁村の柳も文人の造句にあらず。絲の如く降りそゞぐ雨に、薄青き煙をこめて、重く小市街の上を覆ふものは何ぞ。

これはまさしく独歩の寓居であった山際の坂本邸の二階からの眺望である。

そして続いて、

時に清正公の信徒が打つ太鼓の音、雨にしめりて重く響き来り、名も知らぬ小鳥、門前の柳の頂に上りきて、雨と夕暮とを嬉れしげに声を立て、囀り、二羽の、これも吾が知らぬ鳥、もつるゝ如くに並びて、上に下

に飛びて山の端にかくれ去り。暫時して柳なる鳥も何れにか去り、太鼓の音のみぞ愈々重げに響きける。市街寂々として人なきが如し。水田に鳴く蛙遠く又近し。とある。これも山際風景である。

また友のことを思い、阿蘇山の煙を憶い出し、子どもの頃を追憶して夕暮の一時を楽しいまたかなしい心地に駆られている。そして少年時代の同窓の友大野太一を思い出し色々と思像する。そしてこの大野が、「浮世の波」の主人公エエリヒに似ていると思ひ、一首の古歌を思い起して口ずさんでいる。

その古歌は「せきとむる柵しがらみぞなき涙川　いかに流るゝ浮身なるらん」という歌である。

そして、

頭を挙げれば、夜陰已に全く市街、山岳田野、川流を包みて、雨のみぞ愈々降りそそぎ、水田の水薄く光りぬ。耳をそばだて、聴けば雨の音にまじりて老松おひ繁る馬場の彼方より、遠瀬の如き響かすかに聞へ、更らに耳を澄ませば何処よりか小児の泣き声聞へ絶へつす。提燈の光一個闇のうちに現はれて小路を横ぎり忽ち又闇のうちにかくれぬ。

と、ある。昔の山際の前面は一面の田圃であつたのである。そうして明かりをつけ机に向つて都の友へ手紙を書き、父母にも書いた。

夜の十時を過ぐる半ば、かくして吾が土曜日は過ぎぬ。燃火をかすかにして床に入り暫時雨の音と遠き松風の響きをきゝてありしが忽ち安き眠りに入りける。嗚呼安き眠りに入りける。と結んである。

裏に城山を背負い前に田圃がひらけ、街より隔たつていた山際の――今は前には家が立ち並んで田圃は全く無く街つゞきになっている――閑静な風景をスケッチ風にうまく取り入れた名文である。

二、苦悶の叫

これは明治二十八年三月二十一日から四回に亘つて、九天生の署名で雑誌『精神』に連載された随筆である。

独歩が佐伯に居た明治二十七年の六月七日の『欺かざるの記』に、

今日登校を止め、今井氏に与ふる書を記して只今（夜十時）まで費す。書する処は吾が近頃の思想なり、大

約此の日記中に現はれし処なり。

とある。その後もつゞいてこの文を書いている。今井氏とは今井忠治氏で、独歩とは山口中学校以来の親友で、後に書いた小説「暴風」の主人公となつている。この「今井氏に与ふる書」は、書き改めて「信仰生命」と改題して、独歩の遺稿として残っている。そしてなおこの「信仰生命」を改作して、この「苦悶の叫」を作つたのである。

この「苦悶の叫」は、

親愛なる友

○君足下 君と余とは一朝の交に非ず、十年心友の友なり。余が胸中の秘密若し打明けて漏らす人ありとせば、君の如きは実に其の最初の一人たらずんばあらず。

今や余は胸間万斛の涙を有す、炎々たる猛火を有す。嗚呼如何にして之れを打出す可き。余に天才の筆なきを如何せん。余にゲーテの筆なきを如何せん。然りと雖も遂に黙して止むを欲せず。

乞ふ、余をして自由に語らしめよ。

と、書き出して、独歩自身が毎日思索しつゞけている人

生観、自然観、宇宙観、信仰心などについて、『欺かざるの記』に記したことをあげては論じてある。勿論文学論もある。

そして、

君も知る如く、『欺かざるの記』は直感即席の筆なり。故に前後重複、乱雑不明、又た他人に示すに堪えざる者。されど茲には一字を換えざるを欲す。吾が苦悶熱情は又た確かに此乱文のうちに現はるれば也。

と、書いて、二十七年の五月十八日と十九日の記をそのまま記してある。そして二つとも岡の谷―独歩は寂寞の谷と名付けていた―に夜散歩して書いた記である。

十八日の記は、

―吾今寂寞の谷を独歩して帰り此の筆を採るなり―と書き出し、戦慄は私の頭の中から足の爪先まで及び、幾度も勇を鼓してみたが、私はとうとうこの恐ろしさには勝てなかった。その寂しさから来る恐ろしさはたまらなかつた。何故恐ろしいのだろうか。たゞ夜の暗さが恐ろしいのか、墳墓と森が恐ろしいのかと考えた。しかし、自分は発見した。自分が知らない気高い真の世界は、自分の恐怖の奥にあるのだ。寂しい森と深流と星影と月光と谷風と梟の声と大空と、この自分との

世界が、真の世界であることを。

若し自分に少しの恐怖心がなく、心から真にこの寂寞を愛し、静かな森の下で、星影と月光の下で、眼を開いて沈思することが出来たら、自分の身についたけがれは全く落ちてしまい、神、自然、人間、わが使命について悟ることが出来るだろう。

真の書物、真の教、真の世界は、深夜の城山の上であり、月光の下無人の森にある。

「恐怖」これは自分の信仰が極めて弱いことを証明する。少し恐怖があれば信仰はそら言である。恐怖心、去ってしまえ。

と、記されてある。

また、十九日の記には、

今晚もまた寂寞の谷を散歩して帰った。(十時十分)。今晚は明月に出会った。昨夜の恐怖は嘘のように去った。しかしまだ完全ではない。今夜は杉の森を通りすぎて、坂の上の平場まで来た。自分は白状する。自分はこの寂しい山林や月光の下で神を信ずることが出来ない。自分には、大きな堅い真の信仰がないのだ。

自分の魂はどこにあるのか。自分はたゞ五官によって周囲のものを探っているだけだ。自分の眼はたゞ星

と大空と月明と森と墳墓とを見ているだけだ。更に深
遠なものを見ることが出来ない。

見よ、月の光の下に墳墓が累々と立っている。自分
もやがてはこの石になるのだ。寂寞の谷で自分の感情
はたゞ荒れ、たゞおののく。あゝ愛はどこにある。美
はどこにある。

と大要記されてある。

そして恐怖について論じ、信仰心について述べてある。
次に、○○君足下と稿を改めて、わが国の宗教界、文
学界、政治界を批判してある。

また次に、

五月五日の事、吾四人の青年を伴ふて近郊を歩し、
遂に小丘に登りぬ。時に夕陽西に斜めなり。旧城市、
遠村落、田圃、河流、海湾、島嶼、悉く双眸のうちに
落ち来る。暖々山家遠く、依々里道細し。白帆静かに
流を下るあり。煙波茫茫遙かに四国地を微暝のうちに
つゝむなり。西に連なる山々は、日を背うて立つが
故に其色紫。東に立つ峯々は日を受けて眠るが如く其
色のどかに輝く。吾等この頂に立ち草を敷て横はりけ
り。則ち仰で悠々蒼々たる無限の大空に對しぬ。

高きに登りて大觀すれば、人は自から其感情を高め

来る。殊に西に沈む大日を目送し乍ら晚春の美和好風
のうちに自由に呼吸するに於てをや。然り吾等の昂り、
吾等は自由に語りぬ。

と学館の生徒を連れて夕刻城山に登ったことをはさんで、
この話の内容を書いてある。

また続いてエマルソンの言葉をあげてその感想を綴り、
ワーズワースの詩人としての価値を論じてある。

独歩の佐伯在住は僅か十ヶ月であったが、この間に於
ける読書と思索によって独歩の胸中に形成された思想は、
彼の全生涯を通して彼を支え、彼の作品の源をなしてい
るように思われる。閑さえあれば散策して自然に接して
思索を重ねていたその自然觀、人生觀はその度毎に大き
く高まりを見せていた。

三、豊後の国佐伯

これは明治二十八年の五月十日から四回に互って国民
新聞の「社中小品」欄に連載された隨筆である。その時
の署名は三十六灘外史であった。名文としてよく知られ
たものであった。

この文は、

二十六年の夏の終りより、二十七年の夏の初めに至

るまで、己れ豊後の佐伯に故ありて住みたり。

豊後の地、山嶮にして溪流多し、所謂ゆる山水の勝に富む。佐伯は其の一市市人口五千と称す。もと城下なり、二萬石の小藩主を毛利氏と呼ぶ。但し長州の毛利家とは縁もゆかりもなき也。

茲は別天地なり。国道の通ずるあるなく、又た航海の要路に当らず。山多く己に水田に乏しく、地瘠せて物産少なし。

殊に余に取りて別天地の感ありたり。今ま思ひ起す者の一二を左に録す。

と序文を書いて、一、梟声。二、乞食。三、城山。四、黄昏。五、番匠川。六、柿の六つの文を記してある。次にその大略を記そう。

一、梟声

そのもの淋しいこえがいま猶耳にある。城山、五所明神、馬場で春の夕暮に聞く。

また城山のうしろ若宮八幡宮の杉の暗い梢に聞く。独歩はこの鳥を「夜の悲しき鳥」と呼び、梟の声を聞いて、子供の頃習い覚えた指を組んで笛とし、梟の声のまねして鳴らすと、梟はそれに答えて一層さびしい調で鳴く。

そしてしみじみと悲しみを感じている。

城山には今でも梟が多い。春から夏にかけて、城山に近い山際では毎晩この哀れな声を聞く。

二、乞食

余が始めて此の乞食を街頭に見たる時は、之れ地獄の垣を脱け出でし者かと傍らの人に語りき。

と書き出し、紀州の年齢のこと、生れた国とその名のいわれなど記して、

余は彼の怒りたるを見ず、笑ひたるを見ず、泣けるを見ざりき。

と乞食紀州の風貌を叙して、

天地孤独とは彼れの事ならめと思ひやりし時は涙なきを得ざりき。

と深く同情し、

市人は一口に彼れを乞食といへども、余は屢々「彼れは何者」と自ら問はずして止む能はざりしなり。

と結んである。乞食に深く同情して記された文で、その風貌を巧みにとらえている。

紀州は筆者たちもよく覚えていた。私どもの子供の頃にはまだ生きていて、家の前に欠けた椀を持って立って



お倉 右端の小さい家がお倉の井戸
前面は麦畑（明治40年頃）

いたり、ごみ捨て箱の中をあさっていた姿をよく見たものだ。容貌は下ぶくれの平顔で、目は細く鼻は低くて、頭は蓬髪で、背はあまり高くなく、年はいつ見ても十七八に見えた。裾のぼろぼろ切れた着物に縄の帯で、ぼそぼそ歩いてた。これが私の印象である。菅一郎画伯の画かれた紀州の画があるが、よくその風貌をとらえている。この紀州は、風邪をひいて橋の下に寝ていたのに、子守たちがいたずらに火をつけて、その為め焼死したという哀話が残っている。

この乞食紀州は、この後に独歩が書いた名作「源おぢ」の脇役として登場している。

三、城山

秋の半ば過ぎ、余は紅葉狩りせんとて城山の頂に登り、落葉蕭々の間屢々耳を澄まして風の行衛を追ひ、吾れ知らず古跡一種の寂寞に融け行々楽みたり。

と書き出し城山の美を描いてある。文中にあるように独歩は佐伯に來ると先ずこの山に心が動き、佐伯を去っても眼の底からその景色が心から去らない。この山が無かったら佐伯はないのも同然である、と佐伯在住の間最も愛した山である。佐伯に着いた翌日の十月一日に弟収二を連れて早速登り、その眺望を楽しんでいる。

城山の四季の様子を美しい文章で綴り、そして城山を称えて、

佐伯の春は先づ城山に來り、夏先づ城山に來り、秋又た早く城山に來り、冬はうど寒き風の音を先づ城山の林にきく也。

城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。佐伯は城山のものなればなり。

と、詩のような名文句がある。これは佐伯の人誰れもが

銘記すべき佐伯情緒である。

四、黄昏

夏のたそがれの頃の山際風景をスケッチしたものの一つである。山際の「お倉の井戸」に夕方になると、水桶（にない、佐伯方言）を六尺棒で担いで水汲みに来る少年少女たちで大賑いになる。その情景を叙した文である。山際に住んでいた独歩は度々眺めた風景であつたらう。未だ水道の通つてなかつた昔の佐伯は飲み水に苦労した。各家々に井戸はあつても飲める水の出る井戸は極く少なかった。飲み水はとどころによい水の出る共同井戸があつてそれを汲んで来て使つていた。朝夕担桶を担いで行つて水を汲み込んで担いで帰り、台所のはんど（水瓶、佐伯方言）に注ぎ入れ一杯になるまで幾遍も通つていた。これがその頃の子供の一つの役目であつたのである。

この文ではその情景を面白く巧みに叙してある。姉と弟と一つの桶を重げに担いで、十間行つては休み、五間歩いては休むものもあれば、威勢のよい少年は一人で二つの桶を担いで走るものもある。このお倉の井戸には土族屋敷の子女が来るので、「彼等は遂に土族の子女たる

可憐の風采を失はざる也」と結んである。

町中のあちこちにあつた共同井戸は、上水道が開通した後、殆んどみな潰されてしまつたが、この山際の「お倉の井」だけは、今なお昔のまゝに残っている。昔この井戸は瓦ぶきの井戸やかたで覆つていたが今はない。しかし大きな丸形の御影石造りの井桁は昔のまゝだ。正面に「安井」と彫り込まれてある。この井戸は旧藩時代、飲み水の少ないことを心配した今泉元甫が私費を投じて造られた、三井の中の一つである。佐伯に残る貴重な文化財の一つである。

五、番匠川

年老ひたる旅客が連れもなく、独り日向地へと此の川を渡り行く姿を見送りしは、余が佐伯に着したる其日の薄暮なりき、これ余が此の川を見たる最初なり。と書き出してある。独歩の日記には誌していないが、佐伯に着いた日の夕暮に船頭町の川岸を散歩して、この番匠川の美しい流れを眺め、強く心を引かれたのであろう。奥深い「椎茸を作る谷」から流れ出て、溪流を集め瀬となり淵となつて、はえ、鮎、鮎、鯉などを養い、また奥山で切り出した材木を流し、佐伯の街に沿つて流れて

くる。城山の腰で淵をなして、海からさかのぼってくる朝夕の潮と交っている。下流の方は大きなデルダを作り、堅田川と木立川と合って海に注いでいる。と番匠川の趣きを筆巧みに書いてある。

高きに登りて見ろせば、佐伯の近郊の平地は、川流縦横に乱れ、思も寄らぬ山蔭に白帆を見ることあり。至る処の村落影を倒しまに水に投ずるを見るなり。

とある。また川面に山容を写して煙草に似るところから煙草山の名がついた話を聞いて面白い。と記してある。しかしこんな景色は今の船頭河岸では見ることは出来ない。河川改修によって流れが変わり、川は狭くなって昔の面影は全くない。

次にこの船頭河畔に毎朝集まってくる漁村の渡船（おろし）の様子を記してある。

色の黒い船頭、赤い襟をつけた女、柿を入れた籠を背負う老婆、饅頭の子をしばって竹枝で担いだ男、医者に行く若い男などがやがやと混雑する様子を面白く記してある。

独歩が佐伯に来て間もなく、二十六年の十月十三、四日にかけて大時化があり洪水が出て、池船橋は流失した。そのあと渡し舟で渡していた。十一月二十四日の『敷か

ざるの記』には、馬をこの渡し舟で渡した情景を記してある。

一日村落に遠行して疲れはて、新月の影薄く地上に印する頃漸く此の渡場につけば、対岸の燈火鮮明に水に映じて動く。已に舟に乗りて河の半ばに出で上流を顧みれば、水光天に映じ、暮色水に落ち、宵の明星水底に在りき。

と結んである。この文は美文である。

六、柿

佐伯名物の「樽ぬき柿」のことを叙述した文である。

佐伯は汁粉、鮎、焼甘藷の新市街に非ずして、柿、梨、枇杷、栗の古城市なり。其うち殊に此地の秋の甘露とも云ふ可し。

と書き出してある。

秋の頃郊外に出ると到るところにその柿の実を見る。独歩はこれを赤き星と叙してある。

佐伯の柿には核がない。その形は平たくて丸い。直径は一寸五分ぐらい。渋くてそのまゝでは食えない。湯ぬきにするか樽ぬきにして食べる。三百個ほどを酒樽に入れ、十日ほど経てその樽の鏡を開くと、その香りは何と

も言えない。手にとつて見ると重い。汁が多いからだ。握ると堅く、口に入れるとすぐ溶け、液は透明で冷たい。大きいものなら二つと食えば満足する。しかしかつて鹿狩に行つて帰り道で、村の女の籠から買って五つ食い、また五つ食つたことがある。朝食にかえたのだ。と記してあるが、樽ぬき柿はこの通りだ。樽から開け立てのじつと汗をかいた柿の皮をむいてかぶりつくときその味、その香り、今も忘れることが出来ない。現在では殆んど見当らない。富有柿に変わってしまった。独歩は弟収二とこの柿を買い求め、それを持って城山に登り、西の方柵牟礼山から南東の方と四方を眺めながら柿を食つたことを記してある。何でも独歩はこの佐伯に居たたった一秋に、三百の柿を食つたそうである。

そして最後に、

佐伯は実に果物の古城市なり。此地に城山なく、番匠川なくとも、猶ほ彼の柿だにあらば以て再遊三遊、四遊するに足る。

と結んである。余程この樽ぬき柿が好きであつたのであろう。

この「豊後の国佐伯」は明治時代に於ける佐伯の自然

と風物を筆巧みに描き出した一つの風物誌といつてよい。佐伯人の必読すべき名文である。

四、源おぢ

これは稿を改めて別に書くことにする。(続く)

火除け普請(ひよけふしん)

昔の民家は萱葺きが殆んどで、一度火を出せば家中は火の海、軒先から屋根をなめて火の手をあげ、隣接の家々に燃え広がり、アツというまに村中丸焼けとなる。そこで「盗人はひとかるい、火事は村中」として、互いに火事をおそれ、村毎に火伏せ地蔵をまつて、無事息災を心がけていた。

そこで農家では、二つの知恵を生み出した。すなわち土蔵をつくり、衣類・夜具・穀物をそれに収蔵する。またはその居宅を火除け普請にすることであつた。

この火除け建築は勿論瓦葺き、隣家に面する部分を部厚い土壁にし、それから破風・軒先へと、ことごとく漆喰で塗り上げ、いわゆる大壁造りとした。つまり家毎の嚴重な防火壁とした。全く先人の生活の知恵であつた。

その火除け普請が、佐伯の農山村には今だに残っていて、民俗資料として息づいている。楽しいではないか。しかし、もう数少ない建物となつている。

(羽柴)